

◎食のリスクコミュニケーション・フォーラム 2016 第1回 『消費者の食の安心につながるリスクを議論する』

【開催日】 2016年4月24日(日) 13:00~17:50

【開催場所】 東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/campus/overview.html>

【主催】 NPO 法人食の安全と安心を科学する会 (SFSS)

【共催(協賛)】 一般財団法人社会文化研究センター

【後援団体】 消費者庁、東京大学大学院農学生命科学研究科附属食の安全研究センター

【対象】 食品関連行政の担当者、食品事業者の広報・お客様相談・品質保証担当、

リスク研究者、マスメディア、消費者団体・市民団体、など

【定員】 先着50名

【参加費】 3,000円／回 (当日会場にて現金で申し受けます)

* メディア関係者、SFSS会員は参加費無料

【参加申込み】 http://www.nposfss.com/form_riscom2016.html (4月21日で受付終了)

【お問い合わせ】 SFSS事務局まで

(TEL:090-3527-0273、email: nposfss@gmail.com)

【各講師のご紹介&講演要旨】

①岸本 充生 (東京大学公共政策大学院 特任教授)

『食の安心に資するための基準値はどうあるべきか』

消費者が食の安心を得るために基準値の存在は不可欠である。しかし、基準値未満であるので安全という単純な説明は、基準値を上回った際に即、危険という認識につながる。基準値といつても、一日許容摂取量と個別食品の残留農薬基準値ではその意味は全く異なる。また、遺伝毒性を持つ発がん性物質のような「閾値のない物質」の場合、どのように基準値を決めるべきか、また決められない場合はどのように安全・安心を説明すべきか、まだ十分に定まっていない。こうしたことから、食の安全に関わる様々な基準値の意味や根拠を事業者、行政、消費者、マスメディアが共有しておくことが社会のリスクリテラシーを高めることにつながると考えられる。

②平沢 裕子 (産経新聞東京本社編集部文化部 記者)

『メディアと食の安全』

マスコミにはジャーナリズムとエンターテインメントという2つの顔がある。テレビのワイドショーや雑誌記者はエンターテインメントに加え、センセーショナルな話を狙って報道する。そのかっこうのネタとなってるのが、食の危険をあおる情報だ。

新聞も、センセーショナルまでいかないが、エンターテインメントを求めた記事が少なくない。農薬

をまったくつかわないでおいしいリンゴを作ったという「奇跡のリンゴ」の話など感情に訴える記事は、社内の評価が高くいい記事と言われる。科学的に正しいかはあまり問われない。それは、科学的な評価ができる人が新聞社内ではかなり少ないことも関係している。

また、食の評論家を名乗る人たちが安全について正しい知識を持っているかといえばそんなことはない。そうした人たちの間違った知識からくる情報が垂れ流しになっている実状もある。メディアが食の安全をどう伝えているか、私自身の経験談を踏まえ考えたい。

③古川 雅一（東京大学食の安全研究センター 特任准教授）

『リスク情報の伝え方を考える』

人間は、毎日、様々な意思決定を行っています。たとえば、スーパーマーケットに行ったとき、陳列されている商品をみて、味や価格の妥当性、安全性などについて、商品の外装に記載された情報や事前に入手している情報、これまでの経験などをもとに判断を行い、購入するかどうかを決定しています。ただ、このような意思決定が必ずしも合理的に行われているとは限りません。人間には情報の捉え方にバイアスがあり、不合理な意思決定が行われていることが多いのです。本フォーラムでは、人間の不合理性について解説するとともに、消費者へのリスク情報の伝え方を考えたいと思います。

【本フォーラムの主旨】

毎回、食のリスクに詳しい有識者をお迎えし、講師3名（Q&A含み60分）+総合討論（90分）：13:00～17:50（休憩20分）の構成とします。

総合討論では、消費者の「食の安心」につながるリスクコミュニケーションについて、会場からの質問に講師が回答する形で議論します。

以上